

川内理香子『Humans and Tigers』開催のご案内

展覧会名：川内理香子『Humans and Tigers』

会 期：2025年11月5日（水）－12月21日（日）

*「アートウィーク東京」開催期間中は、11月5日（水）－8日（土）は10:00-19:00、9日（日）は10:00-18:00にオープンいたします。

開廊時間：12:00-19:00（日曜-17:00）

定休日：月・火・祝日

オープニングレセプション：11月6日（木）18:00-20:00 *作家が在廊いたします

会 場：WAITINGROOM（〒112-0005 東京都文京区水道2-14-2 長島ビル1F）

*印刷物（DM等）に記載されている情報と一部異なる箇所がございますが、上記が正確な情報となります。

WAITINGROOM（東京）では、2025年11月5日（水）から12月21日（日）まで、川内理香子による個展『Humans and Tigers』を開催いたします。本展は「アートウィーク東京2025」の参加展示です。川内は、食や食にまつわる行為を起点に、身体への関心を深めてきました。その探究は、身体と思考、自己と他者といった二項対立へと広がり、さらにそれらを暗喩するとされる南アメリカやアフリカの神話からインスピレーションを得ています。ペインティング、ドローイング、ネオン管、針金、大理石など多様な素材を扱う彼女の作品には、常に「線」が重要な要素として存在します。身体性や精神性を如実に映し出す線は、その瞬間の身体の動きや感情をスピード感のある筆致とともに画面に刻み込まれます。本展では、これまでに取り組んできた二項対立のテーマの中でも、とりわけ「動物（虎）と人間」という関係に注視し、新作を中心に展示を構成します。



Time to feed the milk, time to become a tiger
2023
oil on canvas
1303 x 1620 mm

同時開催個展①：『The shape of water hardens into stone.』

会期：2025年10月25日（土）- 12月28日（日）

オープニング＆アーティストトーク：10月25日（土）14:00～

開館時間：9:30-16:30（入館16:00まで）

休館：月曜（11/3・11/24は開館）、11/4、5、25、26

会場：黒部市美術館（富山県黒部市堀切1035 黒部市総合公園内）



The dung of the palm trees that grows from the feet becomes fruit and blends into the jungle.
Everyone wants it very much.
2024
oil on canvas
2273 x 5454 mm

同時開催個展②：『Jump over』

会期：2025年10月29日（水）- 12月11日（木）

会場：anonymous bldg.（東京都港区南青山5-1-25）

*表参道駅・表参道交差点の近くのアート展示ビルです。

建物内部には入れないため、歩道からご観覧ください。

主催：anonymous art project



Jump Over Palm Trees (detail)
2025
oil on canvas
1940 x 2590 mm

作家・川内理香子について

1990年東京都生まれ。2017年に多摩美術大学大学院美術研究科絵画専攻油画コースを修了し、現在は東京を拠点に活動しています。川内は、食への関心を起点に、身体と思考、自己と他者といった相互関係の不明瞭さを探究しています。食事・会話・セックスといった多様なコミュニケーションの場面において見え隠れする自己や他者をモチーフに、ドローイングやペインティングをはじめ、針金、樹脂、ネオン管、大理石など多岐にわたるメディアを横断しながら作品を制作しています。制作を通して「捉えがたい身体や目に見えない思考の動きを線に留めている」と本人は語っています。

近年の主な展覧会として、個展『The shape of water hardens into stone.』（2025年、黒部市美術館・富山）、『INNER VECTOR: 11, 72, 2154』（2025年、Beyond Gallery・台北）、グループ展『開館5周年記念展 ニュー・ユートピア—わたしたちがつくる新しい生態系』（2025年、弘前れんが倉庫美術館・青森）、個展『Paintings & Drawings - Food, Animals, Organs, Plants, Bodies, etc, everything outside me is everywhere in the air, I breathe them in, I breathe them out.』（2024年、Van der Grinten Galerie・ケルン）、『Under the sun』（2024年、アニエスベー ギャラリー ブティック・東京）、グループ展『日本現代美術私観：高橋龍太郎コレクション』（2024年、東京都現代美術館・東京）、個展『Even the pigments in paints were once stones』（2023・WAITINGROOM・東京）、『The Voice of the Soul』（2023・ERA GALLERY・ミラノ・イタリア）、グループ展『Body, Love, Gender』（Gana Art Center・ソウル・韓国）、『平衡世界 – 日本のアート、戦後から今日まで』（2023・大倉集古館・東京）、『アーツ前橋開館10周年記念展 – New Horizon 歴史から未来へ』（2023・アーツ前橋・群馬）などが挙げられます。また、2014年『第1回CAF賞』では保坂健二郎賞、2015年『SHISEIDO ART EGG』参加の際はSHISEIDO ART EGG賞、2021年『TERRADA ART AWARD 2021』では寺瀬由紀賞、2022年『VOCA展2022 現代美術の展望 – 新しい平面の作家たち -』では大賞のVOCA賞を受賞するなど、若手ながら確かな実力を持つ注目の作家です。

アーティスト・ステートメント

南アメリカやアフリカの神話の中で、虎は最も重要な暗喩を持つものとして物語に登場する。

虎はそれら神話の中で、身体を構成する食べ物、その食べ物を食べられるように調理するための料理の火を現すもの、あるいは、その料理の火を唯一持つものとして語られる。

レヴィ=ストロースは、南アメリカやアフリカのあらゆる神話の中心には料理の火や身体があると説き、人間のすべての文化の始まりは料理の火にあると分析している。

人間にとって、虎は命を脅かす自然の脅威と同じくらい強い存在であり、人間が文化的なものだと言えるとすると、虎は自然に属す本能的なものだと言えるだろう。

しかし、神話の中で、虎は文化に繋がる料理の火を持ち、それを人間に授けたり、人間の女と結婚したりもする。また虎と結婚した女は、虎へと徐々に変わっていったり、逆に虎が人間のように振る舞い、会話する描写も神話の中で語られる。

そこでは、虎は動物的な、本能的な側面だけではなく、文化的な要素も持っていると解釈できる。人間もまた、本能的な虎に近づく描写があるということは、両者は共存し交換可能なものとして、そこでは捉えられる。

神話の中だけでなく、現実の私たちもそうだろう。

洋服を身にまとい、文化的に生きる人間の奥底には、生の、本能の炎が燃え続けている。

動物たちの知恵はどこから来ているのだろうか。身体の記憶に刻み込まれたものなのか、やはり彼らも身の回りを観察し、思考し、知恵を絞り生きているのだろうか。（きっとそう）

あるいは本能の、また身体の中にも、言語化し得ない知恵や思考は存在していると言えるだろう。

人間と動物は線引きされがちだが、身体と思考の二項と同じように、私たちはそもそも共存関係にあり、私たちの中にも虎は眠り、虎の中にも人間を見ることができる。

川内理香子（2025年10月）



Sitting, 2025, wire and pin on panel,
665 x 525 x 140 mm



reversal, 2025, watercolor and pencil on paper,
240 x 330 mm



Human and tigers, 2025, stone,
90 x 240 x h210 mm

生成変化の神話的躍動——川内理香子における線の拡張について

森啓輔（千葉市美術館学芸員）

川内理香子の絵画では、油絵具とメディウムの混成による顔料を、キャンバスに幾層にも塗り重ね、厚く拡がったその表層——それはあたかも生物の内臓の襞のようだ——をペインティングナイフで鋭く刻む行為によって、画面の内に形象を浮かび上がらせている。そこで繰り返し描かれてきたのは、クロード・レヴィ=ストロースが神話の構造分析において抽出したジャガーやコヨーテ、ナマケモノ、蛇といった様々な動物たちであり、展覧会のタイトルが指し示すように、本展においてその対象は人間と虎、そして両者の関係に光が当てられている。

多層的な色面から、形象を掘り出すようにして描かれる川内の描画法は、粘度を含んだ顔料の硬化という物理的制約を与件としており、ゆえに刻む／描く速度は、制作において最も重視される要素となっている。この自らに課した制約は、必然的に思考を超越した手を、作家に要請するだろう。それは、シュルレアリストらが実践した「自動筆記（Automatism）」を挙げるまでもなく、私=主体という容れ物の外部へと接続していくための通行路だ。その意味において、川内はかつて物語のコードの制御と運用を行使し、神話を語り継ぐ役割を担った媒介的な性質を現代において意識的に選び、絵画制作に取り入れてきたといえる。

線に特権的な位置を与えるそのような作品表現は、当然のことながら、油彩画に限定されることはありえない。これまでに川内はドローイング、大理石、あるいは針金やネオン管を使用し空間を彫刻する立体造形、さらにはファブリックに施された刺繡といった、より多様な造形表現への拡張を試みてきた。それらに共通するのが、線に潜勢する力動であることは明らかだ。多方向に伸長する線のごとく、川内の近年の造形表現では領域横断的に様々な分野への接続を果たしてきたのであり、そこで追い求められてきたものこそが、自己を越え出る存在としての他者なのだ。

食への関心、より正確に述べるならば、口内から身体の内部に取り込まれ、自己との境界が不分明になっていく食の行為への違和感は、これまでの川内の制作行為において、常に実存的な意義を持ち続けてきた。この生を維持するために必要不可欠な行為もまた、他者性の問題に深く起因するがゆえに、豊かな色彩を湛えたその多層的な画面は、自己と他者の往還可能な揺らぎの表象として、不可視の他者を召喚する場となりえてきたはずだ。

本展において、自身が知悉する文化人類学やウィリアム・ブレイクの詩を援用し、川内は人間と虎に「文化」と「自然」という二項対立の越境を見て取っている。包摂され（《House of the garden》）、循環し（《Loop》）、互いに混ざり合う（《Time to feed the milk, time to become a tiger》）描かれた両者の姿態は、実に豊かな関係性を示している。この人間と斑紋を特徴とする虎の両義的な関係から読み解かれるべきは、自己と他者という固有な存在自体への疑いであり、さらには生成変化の可能性だろう。このことは、それもまた可塑的なメディアである絵画を拠り所としながら、大理石やネオン管、ファブリックを用いた制作に限ってだが、その方法論を拡張させ、他者との協働がなされてきた事実と結び付いていることはいうまでもない。境界を眼差しながら人類の記憶の古層を掘り起こし、存在の複数性と生成変化に賭けられた多様な川内の作品は、この苛烈な分断の時代に個々の生、さらには私たちの世界を捉え直すための徵（しるし）となり得ている。



House of the garden, 2025, oil on canvas,
1940 × 1303 mm



Loop, 2025, oil on canvas, 455 × 380 mm



Where the Tiger Has Touched, 2024, oil on canvas,
910 × 727 mm

川内 理香子

1990 東京生まれ

2015 多摩美術大学美術学部絵画学科油画専攻 卒業

2017 多摩美術大学大学院美術研究科絵画専攻油画研究領域 修了

現在東京を拠点に活動中



個展 『INNER VECTOR: 11, 72, 2154』
(2025、非畫廊 Beyond Gallery、台北、台湾) 会場風景

個展

2025

「Humans and Tigers」 WAITINGROOM (東京)

「Jump Over」 anonymous bldg. (東京)

「The shape of water hardens into stone.」 黒部市美術館 (富山)

「INNER VECTOR: 11, 72, 2154」 非畫廊 Beyond Gallery (台北、台湾)

「Please Don't Disturb」 CADAN有楽町 (東京)

2024

「softest chain」 鎌倉画廊 (神奈川)

「Paintings & Drawings - Food, animals, organs, plants, bodies, etc, everything outside me is everywhere in the air. I breathe them in, I breathe them out.」 Van der Grinten Galerie (ケルン、ドイツ)

「Under the sun」 アニエスペー ギャラリー ブティック (東京)

2023

「Even the pigments in paints were once stones」 WAITINGROOM (東京)

「The Voice of the Soul」 ERA GALLERY (ミラノ、イタリア)

「human closely」 Lurf MUSEUM (東京)

「line & colors」 N&A Art SITE (東京)

2022

「Make yourself at home」 日本橋三越本店 三越コンテンポラリーギャラリー (東京)

「Colours in summer」 銀座 蔦屋書店 GINZA ATRIUM (東京)

「Lines」 Van der Grinten Galerie (ケルン、ドイツ)

2021

「Empty Volumes」 WAITINGROOM (東京)

「afterimage aftermyth」 六本木ヒルズA/Dギャラリー (東京)



2020

「drawings」 WAITINGROOM (東京)

「drawings」 OIL by美術手帖 (東京)

「Myth & Body」 日本橋三越本店 三越コンテンポラリーギャラリー (東京)

2018

「human wears human / bloom wears bloom」 鎌倉画廊 (神奈川)

グループ展 『開館5周年記念展 ニュー・ユートピア—わたしたちがつくる新しい生態系』
(2025、弘前れんが倉庫美術館、青森) 会場風景 撮影:木奥恵三

「Tiger Tiger, burning bright」 WAITINGROOM (東京)

2017

「Something held and brushed」 東京妙案ギャラリー (東京)

「NEWoMan ART wall Vol.7 『Easy Chic Pastels』」 NEWoMan ART wall (東京)

2016

「Back is confidential space. Behind=Elevator」 WAITINGROOM (東京)

個展（続き）

2015

「コレクターとアーティスト vol.1」T-Art Gallery（東京）
「第9回 shiseido art egg : 川内理香子展」資生堂ギャラリー（東京）

グループ展

2025

「Plastic Love」Galerie Marguo（パリ、フランス）
「新収蔵作品展／コレクション+ 女性アーティスト、それぞれの世界」アーツ前橋（群馬）
「開館5周年記念展 ニュー・ユートピアーわたしたちがつくる新しい生態系」弘前れんが倉庫美術館（青森）
「自由だ————!! ~多様な幸せと希望に満ちた世界へ~」第一生命ロビー（東京）
「S.F collectionの一瞥 vol. 2」N&A Art SITE（東京）

2024

「日本現代美術私観：高橋龍太郎コレクション」東京都現代美術館（東京）
「奇数ソックスとノード / Nurturing Nodes in the Nook of an Odd Sock」アートギャラリーミヤウチ（広島）
「collection #08」rin art association（群馬）
「カンヴァスの同伴者たち 高橋龍太郎コレクション」山形美術館（山形）
「SPRING SHOW」WAITINGROOM（東京）
「2023年度第4期コレクション展」愛知県美術館（愛知）

2023

「The Hints 今と未来を見つめる12の視点」三井住友銀行東館 1F アース・ガーデン（東京）
「Body, Love, Gender」Gana Art Center（ソウル、韓国）
「AWT FOCUS：平衡世界 日本のアート、戦後から今日まで」大倉集古館（東京）
「アーツ前橋開館10周年記念展『New Horizon—歴史から未来へ』」アーツ前橋（群馬）
「TRANSFORMATIONS: MATERIAL AND DISSOLUTION」Van der Grinten Galerie（ケルン、ドイツ）
「Paper Whispers」Schönenfeld Gallery、（ブリュッセル、ベルギー）
「Good Morning Japan」Nassima Landau Art Foundation（テルアビブ、イスラエル）
「VOCA30周年記念 1994-2023 VOCA 30 YEARS STORY / KOBE展」兵庫県立美術館王子分館 原田の森ギャラリー（兵庫）
「SPRING SHOW」WAITINGROOM（東京）
「2022年度第3期コレクション展」愛知県美術館（愛知）

2022

「OKETA COLLECTION 『YES YOU CAN —アートからみる生きる力—』展」WHAT MUSEUM 展示室B（東京）
「OKETA COLLECTION: THE SIRIUS」スパイナルガーデン（東京）
「VOCA 30 Years Story / Tokyo」第一生命ロビー（東京）
「VOCA展2022」上野の森美術館（東京）
「SPRING SHOW」WAITINGROOM（東京）

2021

「TERRADA ART AWARD 2021 ファイナリスト展」寺田倉庫 G3-6F（東京）
「抽象 Abstraction by CADAN」伊勢丹新宿店アートギャラリー（東京）
「ビューアイング展」WAITINGROOM（東京）

2020

「Inside the Collector's Vault, vol.1- 解き放たれたコレクション展」WHAT MUSEUM展示室B（東京）
「10TH」WAITINGROOM（東京）
「Input / Output」銀座 蔦屋書店 GINZA ATRIUM（東京）
「個性の開花 II ポスト伊作世代～昭和から平成～文化学院を巣立った人々」軽井沢ルヴァン美術館（長野）
「Spinner Markt（スピナーマルクト）」スパイナルガーデン（東京）
「ビューアイング展」WAITINGROOM（東京）

グループ展（続き）

2019

「写真」3F/3階（東京）

「drawings」ギャラリー小柳（東京）

2018

「日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS 2020 ミュージアム・オブ・トウギャザー サーカス」渋谷ヒカリエ 8/COURT（東京）

2017

「spiral take art collection 2017『蒐集衆商』」スパイラルガーデン（東京）

「NEWSPACE」WAITINGROOM（東京）

「ミュージアム・オブ・トウギャザー展」スパイラルガーデン（東京）

「平成28年度第40回東京五美大連合卒業・修了作品展」国立新美術館（東京）

2016

「Stereotypical」GALLERY PARC（京都）

2015

「デッドヘンジ/エステティック」HIGURE 17-15 cas（東京）

2014

「第1回CAF賞入賞作品展」TABLOID GALLERY（東京）

「That I shall say goodnight till it be tomorrow」新宿眼科画廊（東京）

2013

「凸展」TKPシアター柏、アートラインかしわ2013（千葉）

「Home Made Family」CASHI冷蔵庫内（東京）

「Sleep No More」多摩美術大学芸術祭（東京）

2012

「OTHER PAINTING XI」Pepper's Gallery（東京）

「凸展」そごう柏店、アートラインかしわ2012（千葉）

「ドーナツのない穴」多摩美術大学芸術祭（東京）

アワード

2022年 VOCA賞

2021年 TERRADA ART AWARD ファイナリスト 寺瀬由紀賞

2015年 第9回 shiseido art egg賞

2014年 第1回CAF賞 保坂健二朗賞

マネックス証券主催 ART IN THE OFFICE 2014

パブリックコレクション

アーツ前橋、群馬

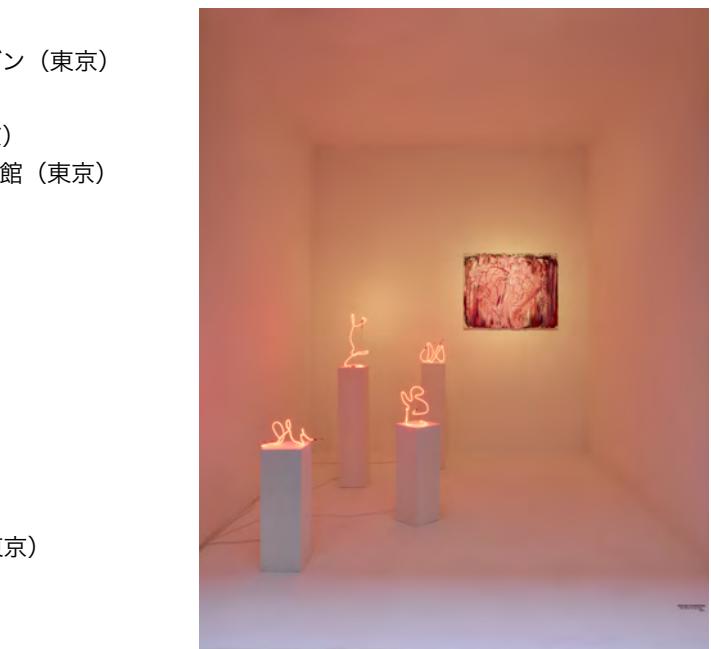
株式会社三井住友銀行、東京

愛知県美術館、愛知

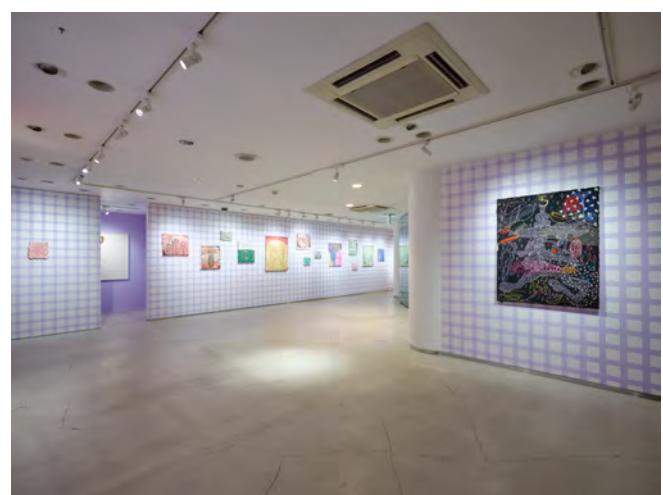
第一生命保険株式会社、東京

高橋龍太郎コレクション、東京

マネックス証券、東京



個展『The Voice of the Soul』
(2023、ERA GALLERY、ミラノ) 会場風景



個展『Under the sun』
(2024、アニエスベー ギャラリー ブティック、東京)
会場風景 撮影：三嶋一路（Artifact）

※本展に関するお問い合わせは、下記連絡先までお願ひいたします。

WAITINGROOM（代表：芦川朋子）

住所：〒112-0005 東京都文京区水道2-14-2 長島ビル 1F

営業時間：水木金土 12-19時・日 12-17時

定休日：月火祝

Tel : 03-6304-1877 Eメール : info@waitingroom.jp

Web : <http://waitingroom.jp>

アーティストウェブサイト

<https://rikakokawauchi.com>